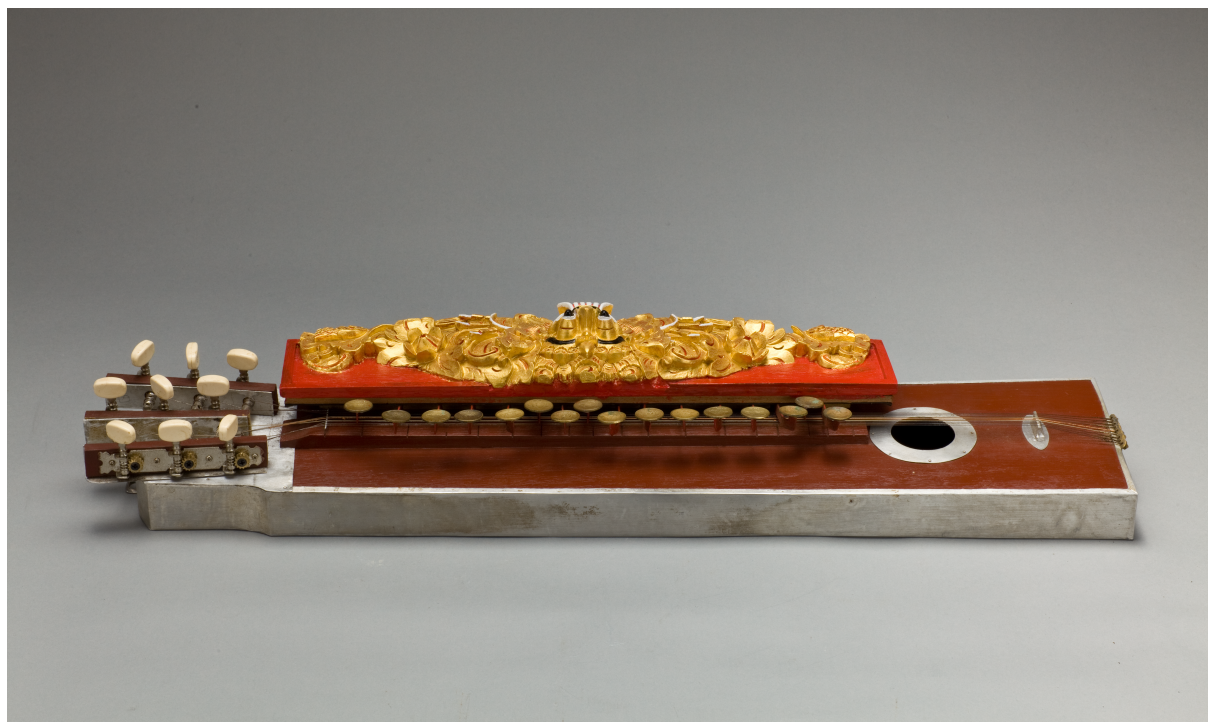


今月の逸品

NO.02 2015.05



プンティン penting

インドネシア（バリ島東部） 2009年
626 mm × 188 mm × 77 mm

バリ島東部のカラングASM県周辺で用いられる弦楽器。音階ボタンを介して金属弦を押さえ弾奏する日本の大正琴は、1912（大正元）年に名古屋の森田吾郎が発明したもので、その後、アジア各地に伝わり改良が加えられたが、プンティンは、そうした大正琴由来の弦楽器の、バリ島ヒンドゥー集落における名称である。イ・ワヤン・ライ氏によって2009年に製作された。古い50ルピアコインを用いた音階ボタン16個が9本の弦に付くが、地域によっては、壊れたタイプライターのキーをそのまま音階ボタンに使用している場合もある。天板の彫刻は、装飾目的で施されたもので楽器との関連はなく、また、ネック部分はギターのそれを転用し、ピックは浜辺に打ち上げられていた亀の甲羅から作られている。胡坐をかいた演奏者が、音階ボタンを上にしてギターのように抱え、左手で音階ボタンを操作しながら、右手に持ったピックで演奏するもので、声楽アンサンブル「ゲンジェツ」の伴奏や器学合奏に使われる。



天板に施された装飾



ルピアコインを用いた音階ボタン



ピック